

## 1 はじめに ～研修のとらえ～

今年度の研修を進めるに当たって、次のことを大切にしたい。

### 1 学び続ける教師を目指して

学び続ける教師のもとで子どもは育つ。学び続ける教師として、研究授業だけでなく、日常的、継続的に授業改善、研修に取り組む。

### 2 「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指して

「共創力」を高めることが、深い学びの実現へと繋がる。「対話力」「情報活用力」をベースに「共創力」を発揮した子どもの具体的な姿をイメージしながら、日々の授業に取り組む。さらにそれを支える土台となる、人間関係形成力・自己肯定感を高めることも不可欠である。

## 2 研究主題

### 共創力を高める子どもの育成

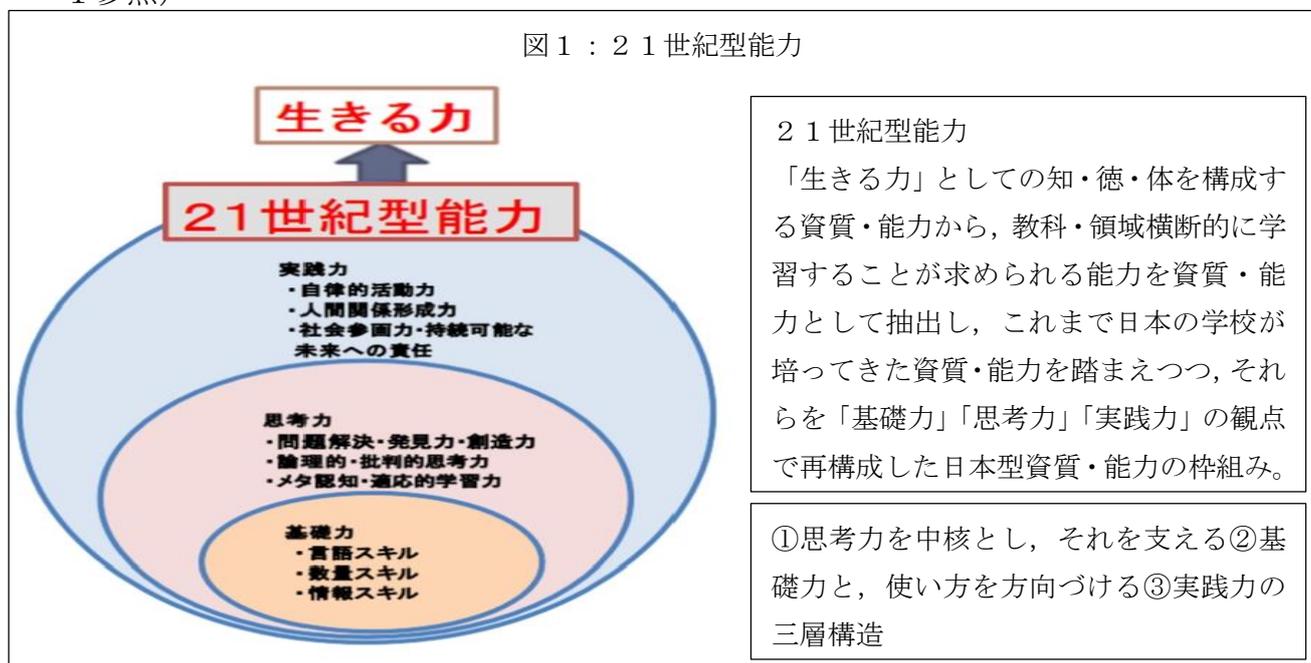
～「問題意識を高める学習課題の設定」の工夫、「対話や深い学びを促す働きかけ」の工夫～

## 3 研究主題設定の理由

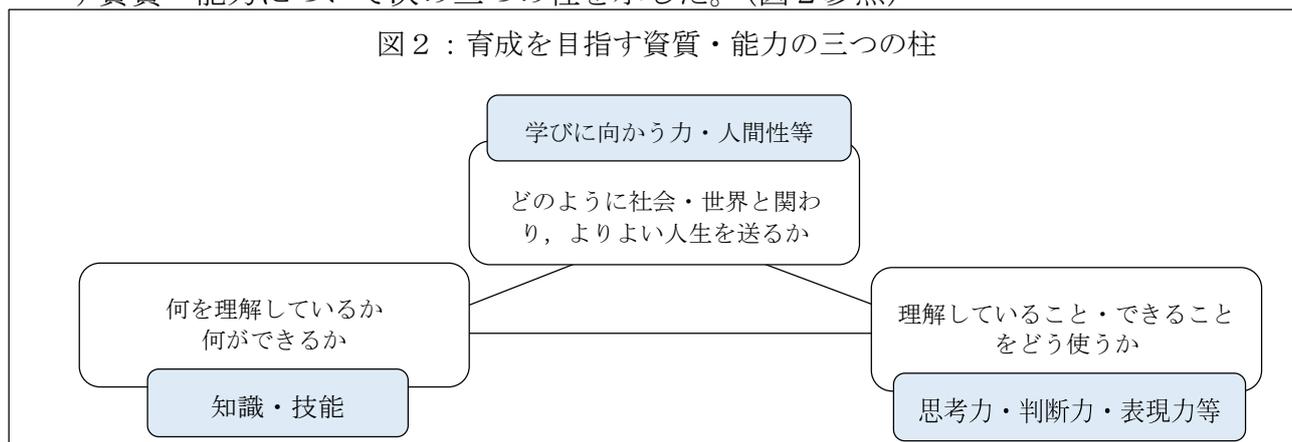
### (1) 社会的な背景

子どもが生きるこれからの社会は、予測困難で変化の激しいものになることが予想されている。こうした社会の中、自分らしく生きていくためには、身の回りに生じる様々な問題を積極的かつ的確に判断する力、問題の解決に向けて他者と協働し最適な解決方法を探り出していく力、様々な知識や情報を活用しながら考えを形成したり創造したりする力が必要とされている。このように、これからの社会を「生きる力」を国立教育政策研究所が、21世紀を生き抜く力「21世紀型能力」として示している。(図1参照)

図1：21世紀型能力



また文部科学省では、2020年度から全面実施された学習指導要領で、育成を目指す資質・能力について次の三つの柱を示した。(図2参照)



つまり、これからの授業は、教師が子どもに一方的に知識等を教えるだけでは十分とは言えない。課題の解決に向けて、他者と協働し、獲得した知識や技能を、他の学習や生活場面でも活用できる資質・能力として一人一人の子どもに育成することが重要である。上記の資質・能力を育成するための主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が求められているのである。

また、令和3年1月26日、中央教育審議会は答申「令和の日本型教育の構築を目指して」をとりまとめた。「令和の日本型学校教育」を構築し、全ての子どもの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びを実現するためには、ICTは必要不可欠であり、これまでの実践とICTとを最適に組み合わせることで、様々な課題を解決し、教育の質の向上につなげていくことが必要であると示されている。ICTを道具として使うだけでなく、学習のどの場面でどのように活用すると学びが深まるのかを考え、効果的に活用する力が求められる。

## (2) 令和4年度校内研修の成果と課題

### ①「課題意識を高める学習課題の設定」の工夫について

「問題意識を高める学習課題の設定」については、ずれやあこがれを活かすだけでなく、切実感や困り感に基づく学習課題の設定、ICTや授業の振り返りを活かした学習課題の設定、単元を貫く課題から子どもの問題意識を高める工夫がされていた。学級の実態に合わせて、様々な方法で子どもの興味・関心を高めていた。

しかし、学習課題の設定(◎の設定)の場面では、やや教師主導で学習課題が設定されている授業が多く見られた。その後の課題解決の場面でも、学習課題を解決したいという子どもの気持ちが高まらず、学習課題に対する意識が薄れていく様子が見られた。子どもが「みんなで課題を解決したい」という思いをもち、最後のまとめまで課題への意識をもって授業に臨むような姿を目指したい。そのためには、教師の発問から問題意識が高まった子どもの言葉(つぶやき)によってつくられる学習課題でなければならない。

### ②「対話や深い学びを促す働きかけ」の工夫について

「対話や深い学びを促す働きかけ」については、「対話」を通して、子どもの思考を広げ、深めることが「深い学び」へと繋がっていくことが見えてきた。そのために

も、「対話」を生む教師の働き掛けが重要であることも分かった。しかし、想定した深い学びの姿まで届かずに授業が終わってしまうことや、深い学びの姿が本当に妥当であったか疑問が残るような授業の様子が見られた。また、対話をさせる場面でも、その場面は本当に対話が必要な場面なのか、対話をする意味や目的がはっきりしていない様子も見られた。

#### (4) 目指す子ども

上記(1)～(3)より、当校の子どもに必要なのは、新たな知識や技能の習得に満足することなく、自ら課題を設定し、その課題解決に向かって他者と対話しながら、新たな考えを創り出していく力である。そのような力を「共創力(きょうそうりょく)」と定義し、目指す子どもの姿を次のように設定した。

### 「共創力を高める子どもの姿」

自他の違いを受け止めつつ、対話を通じて、  
共に課題を解決し、新たな考えを創り出す子ども

#### 五泉小学校で育成する資質・能力

##### 対話力

- ・他者の思いや考えを理解する力(知・技)
- ・他者の思いや考えを受け止めて自分の思いや考えを表現する力(思・判・表)
- ・自分も他者も尊重しようとする態度(学びに向かう力)

##### 情報活用力

- ・情報や情報技術を適切に活用する力(知・技)
- ・情報同士を比較・関連付けたり組み合わせたりする力(思・判・表)
- ・情報や情報技術を進んで活用しようとする態度(学びに向かう力)

教科等固有の  
資質・能力

**共創力**

「自他の違いを受け止めつつ、対話を通じて、共に課題を解決し、新たな考えを創り出す力」

**対話力**



**情報活用力**

**人間関係形成力・自己肯定感**

※「共創力」は「教科等固有の資質・能力」の育成を支える力である。

※「対話力」「情報活用力」は「共創力」の構成要素であり、互いに関係し合う。

※「共創力」の基盤にあるのが人間関係形成力・自己肯定感(支持的学級風土の育成)。

※「新たな考え」とは、考えを変容させるだけでなく、強化することも含む。

## 4 研究内容

### (1) 「共創力を高める子ども」を育成するための授業づくり

日々の授業において、「共創力」を繰り返し発揮する機会を設定することで、教科等固有の資質・能力の育成を目指す。そのために、今年度は「共創力」を高める「五小授業モデル」を構想し、次の2点を授業づくりの主な手立てとして取り組む。

#### 手立て① 「問題意識を高める学習課題の設定」の工夫

授業づくりの基本となるのは課題設定である。昨年度までの研究の結果、問題意識を高める手立てとして、次のように整理される。

- ・ ずれや活かした学習課題の提示
- ・ あこがれを活かした学習課題の提示
- ・ 切実感や困り感に基づく学習課題の提示

これらの学習課題を提示する際、学級の実態に合わせて、ICTや前時の授業の振り返りを活用し、様々な方法で子どもの興味・関心を高める工夫が見られた。

しかし、ただ学習課題を提示すればよいのではなく、子どもが「みんなで課題を解決したい」という思いをもち、最後のまとめまで課題への意識をもって授業に臨むような姿を目指したい。そのためには、教師の「質の高い問い」が不可欠である。学習課題の提示によってどのような問題意識が促されるかをイメージし、発問を練る。そして、その発問によって問題意識が高まった子どもの言葉（つぶやき）から学習課題を設定していきたい。

#### 手立て② 「対話や深い学びを促す働きかけ」の工夫

「共創力」を育成する上で子ども同士の対話は極めて重要であり、対話の質をさらに高めることが大切である。昨年度までの研究の結果から、「対話」を通して、子どもの思考を広げ、深めることが「深い学び」へと繋がっていくことが見えてきたが、実際は想定した深い学びの姿まで至らずに授業が終わってしまうことが多かった。今年度は、深い学びへと繋がる対話を組織していく。

対話を促す働きかけにおいて、まず対話が有効に働く場面かどうか、どのように対話をさせるかを吟味していく。また、対話は思考を発揮している姿としてとらえられることから、熊本大学教育学部附属中学校が思考のキーワードとして示している10の考え方（図3参照）を、対話を促す視点として五小バージョンに整理し、対話の視点を意識させ、対話を促していきたい。

そして、深い学びを促すために、授業における深い学びの姿（ゴールの姿）を教師が想定する。その際、想定した姿が深い学びの姿として妥当かどうかを吟味する必要がある。また、深い学びを促すためには、「深める問い」の設定が不可欠である。昨年度の研究の結果から、次のように「深める問い」の要件が整理される。

- ・ 汎用性を問う
- ・ 共通点・相違点を問う
- ・ 関係を問う
- ・ 効果・有効性を問う
- ・ 新たな観点に着目させる
- ・ 一般化させる

今年度は、この深める問いの要件を基に「深める問い」を設定し、妥当性・有効性を検証するとともに、他にも新たな要件がないかを洗い出していく。

図3：10の考え方（熊本大学教育学部附属中学校）

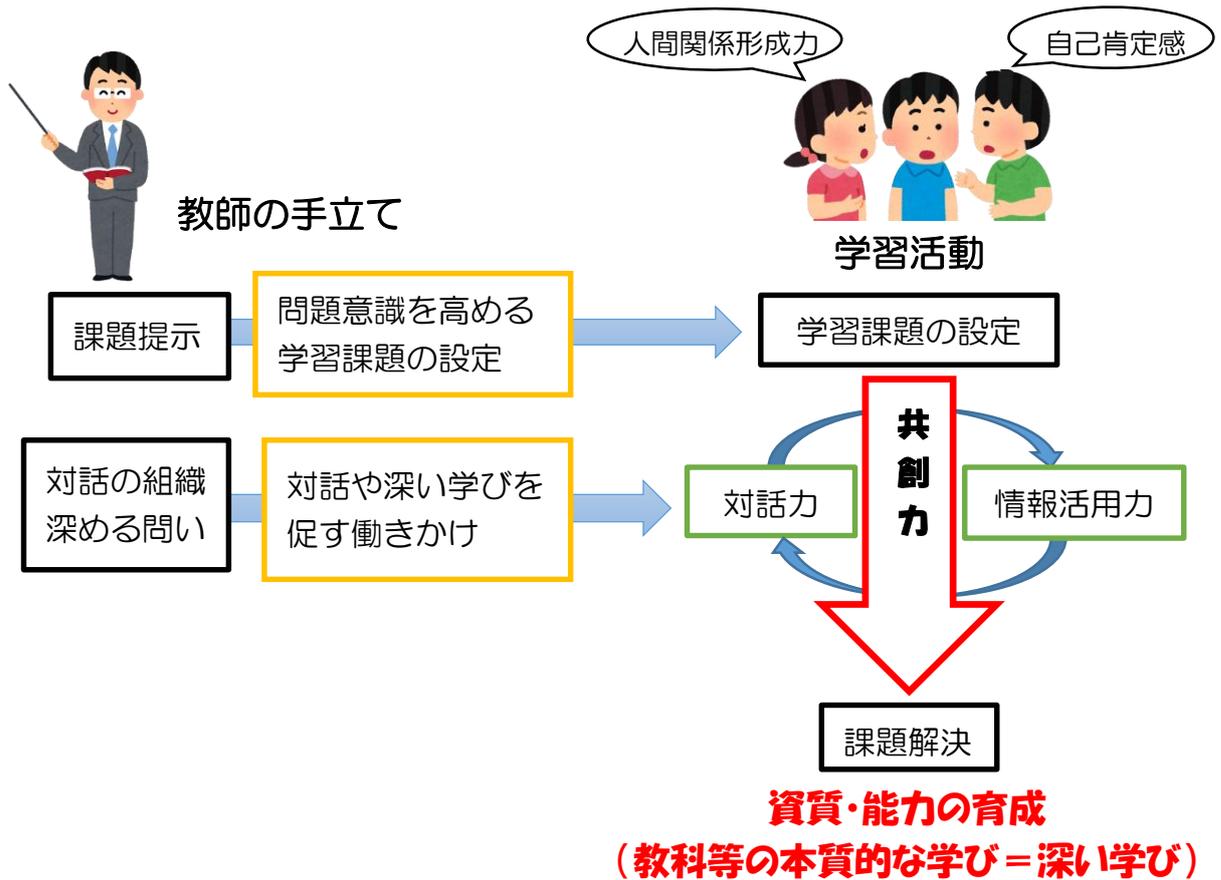
| 考え方   |    | 思考のキーワード   |
|---|----|------------|
|    | 比較 | 共通点は 相違点は  |
|    | 分類 | この視点で分けると  |
|    | 関連 | これらを関連付けると |
|    | 類推 | 類似点から推測すると |
|    | 一般 | これらのことから   |
|    | 具体 | 例えば        |
|   | 多面 | 他の視点から     |
|  | 統合 | 合わせまとめると   |
|  | 批判 | 本当にそう言えるのか |
|  | 反証 | 反対の例を示すと   |

#### 五小授業モデル

- (1) 問題意識を高める学習課題の設定
- (2) 対話を促す働きかけ
- (3) 深い学びを促す働きかけ
- (4) 振り返り

振り返りには、「共創力」を高めた子どもの姿が反映される。今年度、新潟県 Web 配信システム学力向上サポートで始まる「にいがた学びチャレンジ」でも、振り返りの場を重視している。「にいがた学びチャレンジ」の振り返りの4つの観点（①学んだ内容をもう一度学び直す，②知識のつながりや関係について捉え直す，③学んだ内容を自分とつなげ，見方・考え方の広がり深まりを自覚する，④自分の学び方を見つめ直し，自己変容を自覚する）から、「五小授業モデル」の振り返りの観点を整理する。

## 【授業イメージ】



## (2) 授業を支える取組

### 共創力を支える取組

#### ①学習スキル

各学年で身に付けるべき「共創力」「対話力」「情報活用力」を明らかにし、「共創力」を構成する二つの要素「対話力」と「情報活用力」については、学年に応じたスキルとして位置付け、共通認識の上、指導に当たる。

**対話力**・・・対話に必要なスキル（見る・話す・聴く）について、学年の発達段階に応じて設定し、指導する。

**情報活用力**・・・情報や情報技術の活用について、学年の発達段階に応じて設定し、指導する。

#### ②スキルタイム

共創力の基盤である「人間関係形成力・自己肯定感」を育て、共創力の構成要素である「対話力」と「情報活用力」を高めるために、全校でスキルタイムを設定する。「対話」「ICT活用」「人間関係構築」等のスキル向上に取り組む。

#### ③多層指導モデルMIM

低学年における「読み」の力は、その後の学びを大きく左右する。自他の思いや考えを表現したり理解したりする「対話力」にも欠かせない基礎力である。そこで、多層指導モデルMIMを用いた指導を行い、読みの力の底上げを図るとともに、定期的なアセスメントを通して、読みにつまずいている子どもを早期に発見し支援していく目安にする。

## **学力向上の取組**

### ④家庭学習奨励

自分で学習することの充実感を味わわせ、自ら学ぶ姿勢を育てていく。そのために、中学校区の家庭学習強調週間に合わせ、自主学習の取組を奨励する。

### ⑤教師版五小スタンダード

6年間で育てる資質を明確にし、「目指す子ども像」を全職員で共有し、6年間で望ましい学習態度を意図的に育てる。UDLの視点で学習環境を見直した「教師版五小スタンダード」、学習内容の確実な定着を図るための「教師版五小スタンダード～ノート指導版～」を作成し、日常的に実践する。

### ⑥学年会（ワークテスト・Web配信システム）

学年における各種取組の進捗状況確認や単元指導の打ち合わせなど、学習に関わる情報共有の場や、Web配信問題の結果の入力や分析の場として設定する。また、長期休業に単元末テスト（ワークテスト）の結果を分析し、長期休業明けの指導改善を確認する。

## **（3）家庭や地域と連携した「対話力」の育成**

共創力の構成要素である「対話力」を、学校だけではなく、家庭や地域との連携でさらに高めていくことを目指す。多様な人々（家族・地域住民）との対話の場面を意図的に設定し、単元題材配当一覧表、各種教育等の全体計画にも位置付けていく。